

東京農業大学稲花小学校

学校だより【2020年7月21日】第54号



たくさん収穫できました

農大稲花小の子どもたちは、近所にお借りしている畑でトマトやナスを栽培しています。管理・指導をお願いしている湯浅さんの腕前によるのでしょうか、実りは上々です。子どもたちは稲花タイムを利用して畑に行き、収穫物をご家庭に持ち帰っていますが、担当の先生からは「たくさんありすぎて、収穫しきれません！」の悲鳴も聞こえるほどです。一方で、最初に畑に行った組が先に大きなナスばかり収穫してしまうので、次の組の子どもたちがかわいそうと、時間割を変更して行く順番を入れ替えるという心配りもしています。トマトやナスを描いた子どもたちのレポートも、それぞれの学年なりにしっかりしたものになってきました。一口にトマトと言っても、いろいろな品種を区別してレポートに描ける小学一年生は、そうはたくさんいないのではないのでしょうか。

紹介されています

秋には小学校の入学試験が行われます。新型コロナウイルス感染防止の観点から、どのような入学試験が適切か、慎重な検討を進めています。6月の学校説明会はオンライン(Zoom ウェビナー)で行いましたが、1,000名を超える参加者があり、インターネットの力も感じました。

そのような中、相次いで発刊された小学校受験関係の複数の雑誌で他校とともに、農大稲花小学校が紹介されました。本校の特徴などが記されたほか、倍率や入試問題、さらに、本校教員と児童のクラスでの様子や本校の制服が紹介されたものなど様々で、小学校受験に対する関心が高いことがうかがわれます。このような期待の中、児童の教育や学校の運営に携わる教職員一同は、改めて気を引き締めなくてはと感じたところ です。



本校が掲載された出版物

タピオカつながりで アジアにも

「学校だより [53号]」では、農大稲花小の給食のデザートがタピオカだったこと、そしてタピオカの原料がキャッサバという熱帯のイモであることをご紹介しました。実はこの数年来、キャッサバのウイルス病防除のプロジェクト『ベトナム、カンボジア、タイにおけるキャッサバの侵入病害虫対策に基づく持続的生産システムの開発と普及』に研究者として関わっている関係で、プロジェクト関係者に配信されるニュースレターに農大稲花小学校の給食の紹介をしていただきました。毎月1回配信のニュースレター Cas Sa Va Bien! No. 217は、東南アジアを中心に内外の研究者や行政関係者、生産者に読まれています。思わぬところで、農大稲花小学校について知っていただく機会となりました。





(No.216/2020年7月13日)

キャッサバでん粉の高機能 CIATのジョノがタイのWaxy Tapioca Starch 製造会社のことをアップしたので、Waxy って日本語でなんと訳すのが正しいのかなと理研の内海さんに聞いてみた。
(フロンテック農業研究センターのストック種苗生産圃場では5月22日に植えられた株に尿素と塩化カリウムの肥料を施肥)





答えは「ワキシースターチ」=「モチデンブン」で、「ワキシー」というのは、「アミロースフリー（アミロースがなく粘りのもとのアミロペクチン 100%=もち）」と説明するのが理解されやすいようだ。
(AGIのヴァンザン支所に建設した GMO 研究用隔離エリアで QR コードつきの遺伝子改変体を使った研究が始動!)




ただし、Waxy とは、アミロースを作る遺伝子座の名前でもあるらしく、うるち米は大文字の Waxy（優性遺伝子=アミロース有り）で、もち米は小文字の wax（劣性遺伝子=アミロース無し）なんだとか。
(JICA への事務所経理班を迎えて、東農大副学長夏秋先生が校長先生を務める稲花(とうが)小の給食のデザートは死(粉))





ともかく、ジョノが紹介してるタイの SMS 社によると、このキャッサバモチデンブン、パレイシヨコメやトウモロコシのモチデンブンと比べても、凍解安定性が高く（冷凍食品を解凍するときの品質維持力が高い）、透明度の高さや薄味が、料理の見え目や素材の味を引き立てるのに最適なのだそうだ。



ベトナム、カンボジア、タイにおける戦略作物キャッサバ
侵入病害虫対策に基づく持続的生産システムの開発と普及



カップスープをお持ち帰り

7月21日(火)、東京農業大学と包括連携協定を結んでいるサッポロホールディングス株式会社からポッカサッポロフード&ビバレッジ株式会社の2種類のカップスープをご寄贈いただきました。これは、新型コロナウイルス感染防止の様々な措置の中でがんばっている子どもたち、保護者の皆様、そして教職員への応援を！ということで頂戴したプレゼントです。

産学連携においては今までも、ビール原料の大麦やホップの生産・利用法などの研究や、東京農大生の職業体験学習などにご協力をいただけてきています。農大稲花小の子どもたちにも様々な機会を活用して、栽培から加工、流通まで様々な産業があることにも目を向けていかせたいと考えています。



寄贈いただいたカップスープ



ランドセルに大切にしまって持ち帰っていただきました。

自分を律する

公共交通機関でマナーが守れない子ども、教室お友だちにグーパンチをしてしまう子ども、廊下や階段で友だちと衝突してしまう子ども、忘れ物が絶えない子ども、言い争い、泣き虫さん、怒りんぼさん…。小学校では毎日、小さなトラブルがたくさん発生します。その多くは、まだ小さい子どもならではの微笑ましいものと言ってもいいでしょう。子どもたちはトラブルを通して成長していきます。ちょっとふざけただけなのに、あるいは、仲よくしたかっただけなのに、力余ってトラブルになってしまうということもよくあります。どのようなトラブルにも、必ず本人の言い分があり、相手の言い分があるわけです。

しかし「ダメなことはダメ」、すなわち社会のルールに反することや危険な行動については理由を問うことなく、まず止めさせなくてはなりません。言い訳をしたり、言い訳のためにうそをついたり、あるいは他人に原因を求めたりするようになる前に、まず自分を振り返り、自分を律することができる子どもになってほしいからです。これは大人でも中々難しく、低学年の子どもたちにはもっと難しいことでしょう。しかし、「ダメなことはダメ」という「芯」を心に持つことは、子どもが成長にするにつれてますます大切になってくると考えます。先生や保護者が見ていればきちんとふるまったり、注意されれば止めるという他律的な子どもから、自分の持つ「芯」に基づいて正しく行動できる自律的な子どもに育つことを願っています。その上で、どういう気持ちでそのようなことをしてしまったのか、どうして怒りをおさえきれなかったのか、次はどうしたらよいのか、子どもの気持ちに寄り添いながら大人が導いていきたいものです。

校長 夏秋 啓子